

□第一回熊本大空襲の概要（1945年7月1日）

昭和20（1945）年7月1日、第一回となる熊本空襲は、6月17日から始まった日本国内の中小都市空襲での第4回目となるもので、熊本を含む呉、下関、宇部の4都市の市街地が夜間の焼夷空襲の目標となった。熊本が空襲対象となったのは、日本全国180中小都市では、16番目の人口を有する都市だったからだ。

マリアナ諸島に配置された第21爆撃機集団（司令官はカーティス・E・ルメイ）は、45年6月段階では5航空団を要し、熊本空襲はその中の第73爆撃航空団が配当され、所属B29爆撃機162機（熊本到達は154機）が、16時5分から17時17分にかけてサイパン島アイスレー飛行場を飛び立った。離陸後は硫黄島上空を通過、上陸点の佐多岬を經由し、攻撃開始点の河浦町黒瀬崎をすぎ、宇土半島の海岸線に沿って熊本市に侵入した。

熊本空襲の爆撃中心点（MPI）は、本市街地が東西方向に延びることから「明午橋通り交差点」と「呉服町電停付近」の2点とされ、事前に爆撃用「リト・モザイク」図が作成されていた。

熊本空襲の作戦任務番号は241号、空襲は1日23時50分から2日1時30分までの100分間続いた。焼夷攻撃は「E46収束焼夷弾（小型のM69焼夷弾を38発収束させたもので、10719発・369.7トン）」と「M47A2焼夷弾（爆発性のある中型焼夷弾、3444発・688.8トン）」の組み合わせで、そのほかにもE36・E48収束焼夷弾が補助的に投弾された。

「熊本市空襲被害状況」によれば、この空襲により「新市街、下通町、水道町、大江町、新屋敷町、安巳橋通町、水前寺町、草葉町、黒髪町など市街の大部分が焼失し、……県会議事堂、県立図書館、市電気局、専売局工場、熊本郵便局など焼失。熊本市の損害は市街地の約20%に及んだ。被害状況は、被害戸数9077戸、罹災人員36314人、死者388人、重軽傷者475人、行方不明13人、家屋破壊・焼失9077戸」であった。



くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク

□第二回熊本大空襲の概要（1945年8月10日）

米軍は沖縄に上陸して以降、日本軍の組織的抵抗が終わる前から旧日本軍基地を整備し、6月からは本格的に陸軍極東航空軍が移駐を開始した。本軍は、第5・7航空軍から成り、所有する爆撃機のタイプ別に8個群団を構成していた。

熊本市街地への第二回目となる空襲は、8月10日9時56分に始まり、11時40分までの2時間余りの空襲であった。

『新・熊本市史通史編第7巻』には以下の様に記載されている。「次いで八月一〇日午前一一時ごろ、東方から侵入したB29及び小型機の編隊は、白川以東から以南にかけて前回同様の焼い弾攻撃及び機銃掃射を加えた。この結果、市街地の破壊、焼失及び市民の死傷者の被害は更に拡大された。この二回の空襲で下通町・大江町・新屋敷町・安己橋通町・水前寺町・草葉町・黒髪町の各方面（以上七月一日）、本山町・春竹町・本庄町・大江町の各方面（以上八月一〇日）は、ほとんど破壊焼失した」。

但し使用された機体は、米軍資料にある様に「B29」ではなく、米陸軍極東航空軍第5・7航空団の爆撃群団に所属する「B24・B25・A26・A20」の爆撃機で、7月1日にも投弾した小型収束焼夷弾のほかナパーム弾や米軍が持つ最大のM76焼夷弾の攻撃であった。

また『熊本の昭和史』では「熊本のほか、宇土、水俣、隈庄などでも被害が大きかった。鹿児島本線緑川鉄橋橋脚が爆破され不通となり、宇土町では中心部を大半焼失したほか、宇土保健所・宇土駅・宇土国民学校・宇土高等女学校なども焼失し、日本合成は操業不能に陥った。隈庄町周辺では隈庄・豊田・杉上・東部国民学校が焼失。水俣町は中心部が焼失、日室水俣工場は操業不能に陥った」と記されている。



くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク

□空襲に立ち向かった日本海軍機（昭和20年6月）

熊本県内では太平洋戦争末期、来襲する米軍機に立ち向かったり、交戦等により墜落された方々の慰霊碑4基が現在も残されている。和水町三加和和仁「石塚中尉殉空之碑」、大津町外牧畑「慰霊碑」、西原村「八勇士の碑」、宇城市三角町郡浦「杉崎少尉留魂碑」である。

昭和20年6月14日正午頃、現球磨郡錦町の高柱川上流の山間部「七中谷：ヒッチューダン」に、米艦載機11機を迎撃した日本軍機が空中戦に破れ墜落した。旧一武村役場からの要請に応じ、黒辺田小峯（くろべたおみね）集落から多くの村民が救援等に出かけ、山口ともえ（当時22歳）さんは搭乗員遺体の一部（大腿部から足先部）を捜索に来た人吉海軍航空隊員に手渡し、その後は茶毘に伏されたという。墜落した日本機の所属部隊・機種は不明であるが、その後の人吉海軍航空隊員からの伝聞で、物故搭乗員は「柴田某二等飛行兵曹」と称されている。

本会でも、伝墜落日「昭和20年6月14日」前後の海軍戦闘記録等を調べたが、該当の戦闘記録は確認できなかった。伝搭乗員名「柴田某二等飛行兵曹」でも、該当人物は発見できなかった。

一方本会等の調査により、墜落地点で採集された資料の詳細分析調査（零式艦上戦闘機52型乙以降の主桁前桁下面部材、九九式20号2号四型機銃給弾装置一部、主翼リブ補強材に三菱刻印確認等）・文献調査等により、墜落機体は旧日本海軍の三菱製「零式艦上戦闘機五二型乙以降の機体」と確認された。

今回の展示会では、旧海軍零式艦上戦闘機「零戦」は日本人が最も知る旧海軍の名機で、軍装品から当時の状況を俯瞰する。今後本会では、継続して進めている熊本県内航空遺産の資料調査の一貫として、詳細報告等を行う予定である。



零戦五二型丙 昭和20年、厚木基地の第302海軍航空隊所属機



くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク